

第5回 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議

株式会社 LITALICO 野口晃菜

1. インクルーシブ教育システムの評価について

- 何をもち「インクルーシブ教育システムが構築できている」とするかの共通理解とそれを評価するための指標づくりが必要である。
- 例えば米国の場合は何%の時間通常学級にいるか、をデータとして毎年とっている。そのようなデータや、例えば交流及び共同学習の頻度や時間等をデータとしてとり公表できると良いのではないだろうか。
- 例えば LITALICO では子どもと家族の QOL や個別支援計画の目標の達成状況などを指標にし、半年ごとに評価している。

2. 就学先決定の在り方について

- 就学の際に保護者・本人が地域の学校を希望しても「通常学級でその子が学べる環境が整っていないから」という理由で「保護者がずっと子どもの傍についてくるなら良い、そうでなければ支援学校に行くべき」と指導された、などよく聞く事例である。
- 保護者が地域の学校を希望した場合に、保護者・本人の意向に応えられるように、通常学校の特別支援力向上や環境整備の施策を考えるべきではないだろうか。
- まずは、毎年約3千人の公立学校が指定となっている子どもたちの実態を把握し、良い実践は全国に共有できるようにし、課題がある場合はそれを解決するための施策を検討するのが良いのではないだろうか。

3. 特別支援学級・通級の質向上について

- 通常学校を希望する本人・保護者が安心して通えるためにも、特別支援学級の専門性向上と体制整備は早急に取り組むべき課題である。
- 例えば、情緒の支援学級と知的の支援学級がごちゃ混ぜになっており、教育課程も全く同じ教育課程をつかっている学校が多い。
- 情緒の支援学級においては通常の教科を指導すべきところ、ほとんど自立活動のみの指導になっていたり、下学年の教科を適用したりしている学級が多い。

- 知的の支援学級については、知的教科の存在を知らない学級が多い。教育課程の編成方法を知らない教員が多い。
- 通級の教員については、新任の教員が多く、何から始めたらよいのかがわからない状態。
- LITALICO では個別の支援計画作成を支援するシステムを導入している。また、教材を共有するシステムも導入している。個々のニーズに基づく支援計画作成と教材の作成の負担が減り、質が向上する。そのようなシステムを活用するのが良いのではないだろうか。
- 合わせて、通級・支援学級の担任をスーパーバイズすることができるスーパーバイザーを中学校区に1名程度配置するのがよいのではないだろうか。
- 発達障害の専門性は指導・支援する場によっても変わってくる。通常学級の場合、通級の場合、支援学級の場合の専門性も合わせてそれぞれ整理ができると良いのではないだろうか。例えば教育課程の編成方法、個別の指導計画作成、エビデンスのある指導方法、通常学級との連携、保護者支援などが含まれる。その上で特別支援教育免許が良いのか、履修証明等の資格が良いのかを検討するのはどうか。

4. 通常学級の特別支援力向上と通級・支援学級へのリファーマルについて

- 通常学級の特別支援力を上げるための施策が必要である。
- 例えば、米国では Response to Intervention という仕組みが現在ほとんどの州で導入されている。通常学級でエビデンスのあるユニバーサルな指導・支援をした上で、通常学級でできるだけでの $+\alpha$ の支援を付加していき、それでも難しい場合によりやく通級や支援学級を検討する対象となる。本当にその子に別の場での支援が必要かを学校組織としてエビデンスに基づき判断している。90年代に過剰な LD 診断や過剰な特別支援学級等へのリファーマルが起きたため、このような仕組みが今は導入されている。参考になるのではないだろうか。

5. 特別支援教室構想について

- 特別支援教室構想については、3. であげた個別の教育課程の作成を支援するシステムやスーパービジョンの制度、4. の RTI のような仕組みが整ったら実現可能であると考えます。
- 個別に教育課程を編成することとなるため、通常の教科と知的教科や自立活動など個々に合わせて編成できるような仕組みが必要である。